

ラサリーリヨ・デ・トルメスの人生

作者 不詳
岡村 一 訳

並外れた、そしておそらくは前代未聞の事跡が人々に広く知られるに至り、忘却の淵に沈んでしまわないのは望ましいことかと存じます。と申しますのも、人によつてはそれが書いてあるもんを読んてなにか面白味を見いだすかもしれないし、また、あまり深く考えない人々にとつても、おおいに楽しく感じられることがあるかもしれないからでございます。プリニウスが「どんなにくだらな本であれ、なにかしら見るべき点はある」と申しているのも、まさにこの点を指しております。とりわけ人の好みは十人十色、ある者が口に入れない食べ物でも、別の者は好きでたまらないといった場合も。そのためあたしどもは、人によつて同じもんがくだらないと言われたり言われなかったりするのを、目にいたすわけでございます。だからこそどうしようもなくひどいもんでないかぎり、くだらないと捨て去つてはならず、むしろ万人に伝えるべきかと存じます、とくに無害なばかりかなにかの意味で役立つならば。と申しますのも、もしそうでなければ、たったひとりのためにものを書くなんていう人間がどれだけいるでございましょう？ なにしろものを書くのはたいへんな仕事であり、そうやって書く以上書き手は見返りを求めます、いえ、資金ではなく、書いたもんが人々の目に触れて読まれ、もしいいところがあれば褒められるという見返りを。キケロが「名譽は学芸を育む」³と申しているのも、そういう意味でございます。

敵の城に一番乗りする兵士は、一番先にこの世におさらばしたがつていゝるなんて、誰が思うでございましょう？ けつしてそんなはずはなく、褒められたい一心で命を懸けるんでございます。そしてこれは芸術や学問で

も同じ。高い地位に就けられるのを待つばかりのお坊様は、とてもすばらしいお説教をなさいます。心の底から人々の魂のためを思っておいでのお方でございます。けれどそのお坊様に一度尋ねてくらなくださいませ、「いや、お上人様、すばらしいご講話でございました！」なんて言われて悪い気がするかどうか。あるとき馬上槍試合でぶざまきわまりない戦いをなさったあるお方が、見事な戦いぶりだったとお追従を申しした道化に鎧下着をお与えになりました。道化があらひのままを申したとすれば、さて、どうなさっていたやら。

万事このとおりでございます。ですから正直凡人で聖人君子なんかでないあたしも、やつぱり悪い気はしないでございます。よう、お粗末な文章で綴ったこんなつまらない話を少しでも面白いと思う人々がいて、その人々がみんなその世界にはいり込んで楽しんでくださるとすれば。そして、これでもかとはばかり襲ってきた艱難辛苦、命の危険を切り抜けて生きているひとりの男がいることを知っていただけならば。

旦那様にお願ひ申しあげます。どうかこの拙い筆のご奉仕をお納めくださいませ。ほんとうはもつとましなもんをご覧に入れたかったんですが、なにぶん気持ちにはあつても才能が伴いません。あなた様はあの件についてただだけ詳しく書け、物語れと書いてよこされましたんで、途中からではなく、そもそのはじめから書き起こすのがいいように感じました。そうすれば身の上を余さず知っていただけます。それにまた、生まれながらにして高貴な身分にある方々に、そうであるのは他人より運がよかつただけで自分の力によるのではない、むしろ逆風の中、力強く、そして巧みに舟を漕いで望む港へ辿り着いた者たちのほうが、ずっと立派なんだと知っていたこともできます。

それでは旦那様、まずはじめに申しあげておきますと、あたしはラサロ・デ・トルメスと呼ばれております。おやじはトメー・ゴンサーレス、おふくろはアントナ・ペレスといつて、どちらもサラマンカはテハールレス村の産。あたしはその近くを流れるトルメス川で生まれ、それでこの呼び名がつきました。トルメス川で生まれたと申ししたのは、次のようなわけでございます。死んだおやじはこの川の岸にあつた水車小屋で粉を挽くのが仕事で、十五

年以上その番人でございました。あたしを身籠もったおふくろは、ある晩水車小屋にいたとき産気づき、そこであたしを産み落としました。だからあたしはトルメス川で生まれたと、こう言つてまちがいないんでございます。

で、あたしが八つの子供だった時分、おやじは粉にするため小屋に持ち込まれていた小麦の袋によからぬ血抜きをした罪を着せられ、そのせいで捕まりました。そしてあつさり白状して罰を受けました。あたしは神様のお慈悲を信じ、おやじは天国へ連れて行っていただいたと思つております。だつて福音書では、正義のために責められる者は幸いなるかなと言つていてはございませんか。このころムーア人征伐の遠征がございましたが、申したようなくじりでちょうど追放処分になつていたおやじは、それに加わりなかつたある騎士の旦那の馬丁になつてついでにきました。そしてそのとき旦那と枕を並べて討ち死にして忠義を貫きました。

いまや後家の身の上、亭主を失つて頼れる者のいなくなつたおふくろは、大樹の陰へ寄ろうと、市へ出て小さな家を借りて住み、学生の賄いをはじめました。それから洗濯の仕事も。こつちのほうは、ラ・マグダレーナ教会区を領分とする騎士分団長の馬丁連中がお客さんで、それで厩舎にちよくちよく出入りするようになりました。

そのうちおふくろは、馬やなんかの世話をしてる連中のひとりだった黒人といひ仲になりました。この男は夜きて朝帰つたり、昼間卵を買うという口実でやつてきては、うちの中へはいり込んだりしておりました。はじめのころは、こうして家へこられるのが嫌でございました。肌の色や顔の醜さが怖かつたんでございます。でも、そのうち、この男がやつてくるとご馳走にありつけるのがわかりだし、だんだん好きになつてまいりました。なにしろいつもパンや肉のおみやげがあつたし、冬には薪も持つてきてくれて、おかげで親子二人、暖まりましたんで。

で、何度も泊まつておふくろと「お話し」するうち、あたしに弟ができました。色は黒いけれど、とてもかわいらしい赤ん坊でございました。あたしはこいつを膝の上に乗せて高い高いしたり、毛布でくるんでやつたりしておりました。今でも覚えておりますが、このあたしの継父の黒人に遊んでもらつてるときでございませう、チビのやつ、兄貴や母親の色が白いのにおやじがそうでないのにはつと気づき、びくくりしておふくろのほうへ逃げ、指さして、「かあちゃん、おばけ！」と叫んだことがございました。そのとき継父は苦笑いしながら、「このくそっ

たれ！」と申しました。

あたしはまだ年端もいかない子供だったものの、この弟の言った言葉が耳にとまり、自分の姿が見えないせいで他人から逃げる人間は、さぞ世間には大勢いるんだろうなと、そう心の中で思いました。

ところがそのうち運悪くサイド——これが黒人の名前前でございました——これが女の許へ通っていると旦那の執事の耳にはいりました。で、調べてみると、餌用に渡される大麦を四半分ばかりくすねていたとわかりました。それに餌の数^{かず}やら、薪やら、馬ブラシやら、馬の体を拭く布やら、馬の毛布やら、馬着^{ばぎ}やらも、なくなつたと見せかけよろまかしておりました。ほかになにもないときは、蹄鉄を外すなんて悪さまでするようなありさまで。こんなのを持つておふくろの許へ通い、幼い弟を育てる足しにさせていたんでございます。

一介の奴隷でさえ、愛や恋のためとなるとこれだけ大胆になるんでございますから、ご住職様や修道士様が貧乏人や修道院からくすねたものを、かわいい女信者さんのお手当になさつたとしても、別に不思議はないかと。また、それに負けないだけ懐へお収めになつても。

こんな悪さの数々やほかの悪さまでばれたのは、あたしが、正直に答えろ、さもないと、なんて脅されたからでございます。なにしろ子供なもので、怖くなつて知つてるかぎりべらべら喋つてばらしてしまいました、おふくろに言われて蹄鉄を鍛冶屋に売りにいったことまで。継父は鞭打たれ、その跡に熱い油を垂らされるとか、わいそうな目に遭いました。おふくろは異教徒と深い仲になった女に対するご定法どおり百叩きにされ、そのうえ、さつき申した騎士分団長の屋敷に出入りすると、身も心もぼろぼろになったサイドを家へ入れるのを禁じられるという罰を受けました。

弱り目に祟り目になるのだけとは、おふくろは気落ちしながらも気丈に耐えてお裁きに従いました。そして悪い噂から逃れて安心して暮らそうと、ラ・ソラーナ屋という宿屋に雇われ、あの時分そこで寝泊まりしていた客の世話をするようになりました。そのあといろいろ嫌な思いはしたものの辛抱して、弟を歩けるようになるまで育てました。そのころにはあたしもおかげでだいぶ大きくなつていて、酒だ、蠟燭だ、なにになだつてという客の

注文を聞いて使い走りするようになっておりました。

そんなある日、宿屋にひとりの目の見えないじいさんが泊まりにまいりました。じいさんはあたしが手を引かせるのにうってつけたと考え、もらい受けたいとおふくろに頼みました。おふくろは承知して引き渡すとき、この子の父親は立派な男だった、キリスト教の栄光のためジェルバ島遠征で命を落とした、この子も将来きつと父親に恥じない男になるだろうと言ひ、最後に、父親のいないかわいそうな子なんだからどうか優しくしてやって欲しい、たいせつにしてやつてもらいたいと頼んでくれました。じいさんは、そうしよう、この子を小僧じゃなく息子として引きとろうと答えました。こうしてあたしは古い人間の新しい小僧になり、その手を引きはじめました。

それからまだ何日かはサラマンカにおりましたが、そのうちじいさんは思うような稼ぎにならないと、そこに見切りをつける腹を固めました。いよいよ発つという日、あたしはおふくろに会いにまいりました。親子、涙に暮れましたが、そのときおふくろは天のご加護を祈ってくれたあと申しました。

「ああ、きつともうおまえの顔は見られないね。いい子にして、神様にお導きいただくんだよ。あたしはおまえを育ててやったし、いいあるじにもつけてやった。あとは自分で頑張つてやっていっておくれ」

そのあと待つていたじいさんの許へ戻り、連れ立ってサラマンカの市を出ました。町外れの橋へさしかかると、その際に牛らしい動物の石像がございました。じいさんからその傍へいくよう言われましたんでそうすると、今度はこう申しました。

「ラサロ、この牛に耳をあててみる。中ですごい音がするぞ」

あたしは無邪気に言葉を信じて従いました。じいさんは頭を石像へ近づけたと察するや、手にうんと力を込め、そのくそつたれ牛にがつんとぶつけました。この「頭突き」の痛みは三日経つてもおさまりませんでした。じいさんのやつ、申しました。

「まぬけ。これに懲りろ。盲人の手引き小僧は悪魔より一枚うわてでなきや務まらないんだぞ」
そしてしてやったりとばかり、げらげら笑いました。

そのとき目から鱗が落ちた気がいたしました、自分はなんにも考えないほうとした子供だったと。思いました、「こいつの言うとおりだ。いつも用心して身構えとかなきや。だってもう誰も守ってくれないんだから。そして、どうしたらひとりやっていけるか考えなきや」と。

こうして旅がはじまりました。じいさんはほんの何日かで裏の世界の物事をひと通り教えてくれましたが、そのあいだあたしの物覚えがいろいろを見て、とても喜んで申しておりました。

「わしは金も銀もおまえにやれない。だがな、生きる知恵、こいつはたつぷり授けてやるぞ」

その言葉に嘘はございませんでした。神様の次に命をくれたのはこの男でした。自分の目は見えなかったものの、あたしの目を開かせ人生行路を導いてくれました。

こんなどうでもいいようなことをわざわざお話しするのは、下から上へ這いあがれる人間がどれだけ立派か、反対に上から転がり落ちる人間がどんなに愚かか、それをお示しするためでございます。

さて、話を戻して盲人先生について語れば、いや、もう、こいつぐらいずるくて悪賢いやつは天地開闢以来ないと言っているか。あの稼業では名人でございました。祈禱の文句を百いくつも覚えていて、それを低い落ち着いた声で唱えるんですが、その声がよく通って、唱えている教会じゅうに響きわたっておりまして。祈るとき顔つき、これがまたいかにも神妙で殊勝で、ほかの仲間の連中がよくやるみたいに口や目のあたりを動かして顔を歪めたりしかめたりせず、とてもいい感じを出します。これ以外にもあの手この手で金を巻きあげておりました。祈禱だったらなんでもござれ、どんなご利益のあるやつでも知っていると申します、子のできない女のため、お産のため、夫に愛されていない女が愛されるようになるため……。また子を宿している女に対して、それが男か女かを見立てもいたします。で、医療についても、歯痛、めまい、血の道ならば任せて欲しい、ガレノス⁹だろうと自分の足許にも及ばないと大風呂敷を広げておりました。要するにどんな症状を訴えようが、たちどころに、こうしろ、ああしろ、これこれの薬草を手に入れろ、これこれの根を食べろ、なんて答えるというしだい。

こうして誰もがこの男の信者になってしまいます。とりわけ女たちはそうで、言われることをなんでもかんで

も鵜呑みにするもんだから、いいカモ。申したような手を使い、大枚ふんだくっております。ひと月で仲間百人の一年以上荒稼ぎしていたんではないかと。

ところが、これも申しておきたいんですが、これだけ稼いで貯め込んでいながら、あんなにけちで強突く張りな人間は見たことがございませんでした。それはもう並大抵でなく、こっちはいつも死ぬほど腹を空かしているありさま。なにしろ自分だつて腹五、分目も食べないぐらいでございましたから。實際の話、知恵を働かせてうまく立ちまわつてなんとかしていなければ、なんべん餓え死にさせられていたか知れません。あれは海千山千の用心深い男でございましたが、うまく裏をかいてやり、いつも、と言つて言い過ぎなら、たいていは甘い汁をたっぷり吸つておりました。そのためにえげつない悪さもしました。それをこれからいくつかお話ししたそうかと。中には無事済まなかつたときもございますが。

あのじいさんはパンやなんか一切合切を麻の頭陀袋に入れて持つていて、その口を鉄の輪で締め、南京錠をつけて鍵を掛けておりました。袋からなにを出し入れするにもそれは用心深くて、いちいち数を勘定しながらやるもんでございますから、この広い世間のどこを探してもパン屑ひとつくすねられる人間はおりません。そんな中、あたしのふだんの食事といえは、やつにくれるあのふた口分もないような雀の涙ほどの食べ物だけ。

やつが鍵を掛けたあと、あたしが別のことをしていると思つて油断してゐる隙を狙い、袋の一方の側の縫い目をほどこいては縫い直すというのを何度もやりました。欲張り袋の血抜きをしてやるためでございました、ほどこいてできた小さな穴からパンをちよつとどころかごっそり抜き出したり、ベーコンやソーセージを抜き出したりして。こういうふうにもいろいろ狙い目を探しておりました、親の敵ならぬ、因業じじいに味わわされていた死ぬほどのひもじさの敵を討つため。

うまく盗んだりくすねたりできたもんは、全部半ブランカ玉に換えて持つておりました。ご祈禱を頼むと言つて一ブランカ出すとき、相手は目の見えない男ですから、これが礼だと示して渡す者はおりません。そんなときあたしはそいつを受けとつてぱつと口の中へ放り込み、かわりに半ブランカ玉を出しました。どんなにやつが素

早く手を出そうが、そのときにはもうこっちの手品で相場の半分になっているという寸法でございます。因業じいいのやつは文句たらたら。というのも手触りで、すぐそれが一ブランカではない、あれとは違うとわかりましたんで。こう申しております。

「くそ、なんだ、こりゃあ。おまえを連れて歩くようになってから、半ブランカばかりじゃないか。前は礼に一ブランカくれたし、一マラベデーのときだつてよくちよくあつたのに。きつとおまえが貧乏神なんだな」ならばこっちもと祈禱を端折り、半分もいかないうちやめてしまうようになりました。あたしが、客が立ち去ったらすぐマントの裾を引っ張るよう言われていて、そのとおりしていたからでございます。するとじいさん、すぐまた声を張りあげて客を探します、あの稼業の決まり文句、さあさあ、これこれのご祈禱の御用はございませんか、と。

やつは食事のとき、いつも手許に葡萄酒の壺を置いておりました。あたしは目にも留まらぬ早わざを発揮し、そいつに手を伸ばしてそつと二、三度口づけし、またもとへ戻しておりました。けれどこの手はすぐ駄目になりました。やつめ、飲んだ感じで目減りしているのに気づき、それから盗み飲みされるのを警戒して、片時も壺を傍から離さなくなつたんでございます。それどころかずっと取っ手を握りっぱなし。でも、あたしがあれ用に用意したライ麦の長い麦藁、どんな磁石だつてあんなに物を引き寄せる力はありません。あたしはそいつを壺の口へ入れ、中味をちゅうちゅう吸つてあかんべえしておりました。けれど、そうそうぼうつとはしていないあの因業じい、そのうちどうやらおかしいと感づいたらしく、それからやり方を変え、股のあいだに壺を置いて手で蓋をするように——。こうやつて安心して飲んでおりました。

こっちは酒の味を覚えてしまっていて、飲みたくてしかたありませんでしたので、麦藁を使うのはもう無理、駄目とわかると、今度は壺の底に酒を滴らせるための小さな穴をあけ、薄く薄く伸ばした蠟で上手に塞いでおくというやり方を考えつきました。食事の時間になると、寒いふりをしてこのあわれなじいさんの足のあいだに潜り込み、ちよろちよろ燃やしている火にあたります。そうしていると、なにしろ蠟はほんのちよつとなんで熱で

すぐ溶けてしまいますから、あけてある穴から酒の雫がぼたぼた垂れてまいります。それをちようどのところへもってきた口で、一滴も無駄にせず受けるんでございます。知らぬが仏のじいさん、いざ飲もうとするとからっぽなんでびつくり。なにがどうなったのやらわけがわからず、こんちくしょう、なんだこの壺は、酒はどうしたんだと腹を立てます。

「おじさん、おいらに飲まれたなんて言っちゃ嫌だよ」あたしはそうしらばくれてやりました。「だってずっと手を放さなかっただろ？」と。

あるときやつは壺をぐるぐるまわし、あちこち触つてみて穴をみつけ、まんまとしてやられたと気づきました。でも、そのときはなに食わぬ顔をして黙っておりました。

で、次の日、あたしはいつもの場所に陣取つて、例のように壺から酒を滴らせておりました、因業じじいがどんなひどいことをするつもりでいるか知らず、盗み飲みがばれているなんて思いもせず。こうして、仰向けになり、目を細めてそのうまさを感じくり味わいながら甘露を受けている最中、地獄落ちのじじいめ、今だ、思い知らせてやると、あの、あたしには甘くて苦い壺を両手でうんと振りあげ、顔に叩きつけたんでございます。それはもう力いっぱい、もう一度申しますが。あわれラサロは全然用心なんかしておりません。それどころか、いつものようになにも考えず、ただ酒の味にうっとりとなつておりました。ですから、いや、もう、おかげさでもなんでもなく、あのときは空がまるごと自分の上へ落ちてきたかと思われました。

こんなふうにはひどくやられたせいで、ぼうつとなつて気を失つてしまいました。壺は叩きつけた勢いのすごさに粉々に砕け、顔は破片が刺さつて傷だらけ。歯も折れてしまい、おかげで今日までずっと歯つ欠けというざま。あれ以来この因業じじいを憎むようになりました。なるほど気を遣つて優しくし、手当てしてはくれましたが、思いきり懲らしめてやつたとほくそ笑んでいるのがありあでしたんで。やつはあたしが壺の破片で負った傷を酒で洗つたあと、にやにやしながら申しました。

「おもしろいじゃないか、え？ おまえの傷のものが、薬になつておまえを治してくれるんだぞ」

ほかにもいろいろと……こつちにとつては悪い冗談を。

思い出したくもないあの傷や痣^{あざ}が半分がた治るころ、あの血も涙もないやつはこんな仕打ちをあと二、三べんもして自分をお払い箱にするつもりかと勘繰るようになり、ならばいつそこちのほうからずらかつてやれと心に決めました。でも、だからといってあわてず、なるだけやりやすくして損もしない潮時を待ちました。腹の虫を抑えて壺の恨みを忘れようにも、それからの因業じじいの仕打ちがまたひどくて、どうにもなりませんでした。わけもなんにもなく虐めるんでございます、頭を叩いたり髪の毛をぐいぐい引つ張つたりして。

誰かにどうしてそう虐めるんだと訊かれると、待つてましたとばかり壺の一件を持ち出し、こう話して聞かせます。

「このあたしの小僧があどけない坊やだとても？　じゃあ、ひとつ聴いてください、あんなだいそれたこと、悪魔だつて企まないでございますよ」

話を聴いた相手は驚いて十字を切つて申します。

「こんなチビがそんなに酒に卑しいなんて、こりゃ未恐ろしい！」

そして、それにしてもそんな小細工をしたかと大笑いして、こう言うんでございます。

「そりゃ懲らしめてやらなきゃ。どんどんやつたほうがいい。神様だつて褒めてくださるよ」

こう焚きつけられ、やつはますます凶に乘りました。よし、それならばと、あたしのほうでもわざとなるだけ歩きにくい道ばかり歩かせてひどい目に遭わせ、困らせてやりました。石ころだらけのところがあれば、そこをぬかるんでいれば、一番ぬかるみの深い場所を。ぬかるみを歩かせれば、こつちだつて泥を踏むはめになつたんでございですが、そのころは、やつ目の目を二つ潰せるもんなら自分のをひとつ潰すぐらいなんでもない、そんな気持ちになつておりました、もつともやつにははじめから目なんかございませんでしたけれども。こんな嫌がらせをしていたせいでしょつちゅう杖の先で頭の後ろを小突かれ、いつもこぶだらけ。また、そのあたりの毛もむしられておりました。あたしは、わざとやつてるんじゃない、これよりましなところがないんだと言い張りましたが無駄、て

んで信用いたしません。あの悪党め、それぐらい勘の鋭いやつで、物事を見抜く力は並外れておりました。

この煮ても焼いても食えないじいさんがどれぐらい賢かったか、それをお示しいたしましょう。二人のあいだにはいろいろございましたが、その中からひとつお話し申します、あのときぐらいやつたの賢さを見せつけられたことはない気がいたしますんで。

あたしを連れてサラマンカを出たのは、トレドへ向かうためでした。じいさんに言わせれば、その住民は慈悲深さはもうひとつだけれど、金をもっと持つてゐるんだとか。《ない袖は振れぬが、ある手からはこぼれる》という諺、あれを信じたわけでございます。途中、めばしい町や村へ寄りながらまいりました。住民の感触がよくて稼ぎが多ければ足を止め、そうでなければ三日目にはもうおさらばいたしました。そのときの話でございます。ちょうど葡萄摘みの時期でございましたが、アルモロークスという村へさしかかったとき、お百姓のひとりがひと房あいつに恵んでくれました。実を入れた籠は手荒く扱われるものでございますし、おまけにこのころの葡萄は熟れきっておりますから、やつ手の上で粒がばらばらになりました。頭陀袋に入れたら潰れて中のもんがべとべとになりそうでしたんで、やつは「碗飯振舞い」することにいたしました。持ち歩けないのに加え、あたしの機嫌を直させるためでございます、その日はさんさん膝で蹴ったり殴ったりしておりましたんで、いっしょに柵に腰掛けたあと、やつは申しました。

「今日はひとつ気前よくご馳走してやろう。今から二人でこの葡萄を食うが、わしと同じだけ食わせてやる。こういうふうに分けるんだ。まずおまえ、次にわしと、かわりばんこに摘まんでいく。ただしおまえは一回につきひと粒しかとらんと約束するんだ。わしはしまいまでちゃんとやる。これならインチキなしだ」

こう決めたあと二人で食べはじめました。けれどすぐ、もう二回目には、あの嘘つきめ、やつばりやめたとかかり二粒ずつ摘まむようになりました、こつちもきつとそうしているにちがいないと勘繰つて。やつが約束を破つたのを見て、同じようにするだけでは気が済まず、もつと上をいってやりました。二粒ずつから三粒ずつ——果ては頬張れるだけ頬張りました。やつは葡萄が全部なくなってしまうと、しばらくその軸を手にとりして

おりましたが、やがてかぶりを振り振り申しました。

「ラサロ、ずるしたな。おまえは三粒ずつ食った、そうだろう？」

「そんなことしないよ。だけど、なんでずるしたなんて思うの？」そう言うと、あのじいさん、まったくしたやつで、こう申しました。

「教えてやろうか、どうしておまえが三粒ずつ食ったとわかったか。それはな、わしが二粒ずつ食ってるのにおまえが黙ってたからだよ」

あたしは心の中で吹き出しました。そして子供ながらも、あのじいさんの利口さにとっても感心いたしました。

この最初のあるじとのあいだには、ほかに面白くて語るべきことが数々ございました。でも、いつまでもだらだら続けるのは憚られますのでこのあたりにしておき、どうやって別れたかを申しあげて、やつの話はおしまいにいたします。

あの折りはエスカローナで宿をとっておりまして。エスカローナ公爵様のご領地の町のエスカローナでございます。やつはあたしにソーセージを渡し、焼くよう言いつけました。やがて脂が垂れはじめると、それをつけてパンを食べ、そのあと巾着から一マラベディー取り出して、酒屋へ行ってこれだけ酒を買ってこいと言いつけました。そのとき悪魔が鼻先に餌をぶら下げました。よく申します、「鼻先の餌は人を泥棒にする」と。火の傍に燕^{かぶ}が一個転がっていたんでございます。小さくてひよろ長くて萎びていてごみ同然で、料理に使えないんでそこに捨ててあったんでございましょう。

そのときそこにいたのはやつとあたしだけ。あたりにはソーセージのうまそうな臭いがたちこめ、あたしは涎がだらだら垂れておりました。そこで、臭いを嗅ぐだけで我慢しなければいけないとわかつてはいたものの、ひたすら食べたい一心で、後先考えず、やればどうなるかという怖い気持ちこそつくりどこかに置いて、やつが巾着から金を出している隙にさっと串からソーセージを抜き、かわりにその蕪を刺しました。わがご主人様は酒代を渡すと、串を掴み、そのごみ同然なせいで料理されるのを免れていたやつを、火の上でぐるぐるまわしながら炙りはじめま

した。あたしは酒を買いに出ました。使いにもソーセージをかたづけるのにも時間はかかりませんでした。戻ってみると、罰当たりじじいめ、二枚のパンのあいだに蕪を挟んで持っておりまして。それを手で触っておらず、まだなにも気づいていない様子。やがてパンを口へ持つていつてがぶりとやりました、やつぱりソーセージを食べるつもりで。ところがそいつは固い蕪だったもので、固まつてしまいました。やつは怒り狂って怒鳴りました。

「おい、なんだ、こりゃあ！」

「えーっ！」と、あたしは驚いてみせました。「おいらがなんかやつたつて言うの？　だつて酒を買いに出てたじゃないか。たぶん誰かここにて悪戯したんだよ」

「いやいや、そんなはずはない」と、やつはかぶりを振りしました。「わしは手から串を放さなかった。やろうつたつて無理だ」

あたしはすり替えてない、悪さはしていないともう一度言いました。繰り返しなんべんも誓いました。だけど無駄。あの因業じじいめひと筋縄ではいかないやつで、隠しごとなんか全然通用いたしません。立ちあがつてあたしの頭を掴むと、鼻を近づけてくんくん臭いを嗅ぎました。そして敏感な獵犬並みに嗅ぎつけたんでございましょう、ほんとうにまちがいないか確かめるため、それはもういらいらして、今度は両手で顔を掴み直して顎が外れるぐらい口を開かせ、ぐいぐい鼻を突っ込んでまいりました。やつのはもともと大きくてとんがった鼻でございましたが、そのときは興奮してさらに一¹⁰パルモばかり伸びておりまして、なにしろ鼻の頭が喉の奥まで届きましたから。

こんなふうになされてとても怖い思いをしましたし、そのうえ食べてからいくらか経つてなくて、あの疫病神のソーセージがまだ腹の中に落ち着いておりませんでした。それになによりあんなでか鼻をぐいぐい突っ込まれ、息が半分詰まりかけておりました。この全部が重なり、そのせいでやつのもんがやつに戻され、あたしが意地穢さのあまりしかした悪事が露見するはめになりました。つまり因業じじいが口にでか鼻を突っ込んでる最中、胃がおえつて感じになり、盗み食いたもんがそいつへ向かつて嘔き出したんでございます。で、やつは鼻とあわてて飲み込んだ疫病神のソーセージが、両方いつべんに口から飛び出しました。

ああ、ぞつとする！ あのと看はいつそ墓の中へはいるべきだった、だつてもう殺されたも同然だったんだから！ 腹黒じじいのやつ、怒り狂いました。騒ぎを聞いて人がどやどや駆けつけていなければ、たぶんあたしを生かしておかなかつたのではないかと。みんなして引き離してくれましたが、そのとき、ただでさえ少なくなつていた髪の毛がやつの手にごつそり残り、顔には爪の跡がつき、喉や首筋も引つ掻き傷だらけ。自業自得にはちがいございません、なにしろこれだけの折檻は口の卑しさのせいでございますから。

因業じじいめ、その場に集まつてきたみんなに向かい、あたしのそれまでのいろんな大失敗を披露におよびました。例の酒の件、葡萄の件、そして今のこの件と、繰り返し話したんでございます。誰もが大笑いいたしました。その賑やかさに、表の通行人がなんのお祭り騒ぎかと次々覗きにはいつてきたほど。それにしてもやつめ、あたしの「手柄話」をそれはおもしろおかしくなんべんも喋るもんだから、あたしはあれだけ乱暴されて泣きべそかいていたのに、話を聴いて笑わなければ、なにかやつに悪いような気がしておりました。

そうしているうち、ああ、自分は弱虫で意気地なしたつたと思ひあたりました。その情けなさにわれとわが身を責めました。つまり、どうして鼻を食いちぎらなかつたのかと。なにしろあれは絶好の機会、鼻はもう半分ぐらい道を進んできていて、あとはただがぶりとやるだけでうちにお残りいただけなんでございますから。あの悪党のもんとはいえ、おそらくあたしの腹はソーセージより嚴重に保管していたんではないかと。それが外へ出ないかぎり、いくら訴えられようが、知らぬ存ぜぬで通せますんで。ほんとにやつておけばよかつた。だつて、そうしていても結局はおんなじだつたでございましょう。

宿屋の女将^{おかみ}やなんか、そこにいた人々が仲裁してくれました。この人たちは、やつが一杯やるためあたしが買つてきた酒で、顔や喉も洗つてくれました。それを見て因業じじいめ、こんな冗談を申しました。

「実際この小僧の手当てには、酒がいくらあつても足りませんですよ。あたしが飲む二年分より、こいつの一年分のほうが多いぐらいで。ラサロ、おまえ、どう見たつて親の恩より酒の恩のほうが大きいぞ。なにしろ親はひとつしか命をくれなかつたが、酒は百ぺんもくれてるんだからな」

続いてやつは何度頭をぶち割ったり顔を引っ掻いたりしたかや、その都度酒で手当てしてやったことをみんなに話して聞かせ、あぐくあたしに向かつて申しました。

「なあおい、幸いなるかな、酒があつて、つて人間がこの世にいとすれば、そりゃあきつとおまえだな」

それを聞いて、手当てしてくれている人々がわつと笑いました、こつちはそんな冗談には全然乗れませんでした。とはいへ、やつの予言はただの冗談にはなりませんでした。あの男のことはあれからこつちなにかにつけ思い出しますが、きつと未来を見通す靈感を持っていたにちがいありません。あとの話を聴いていただけばかりとおり、あの日のやつ^{II}の言葉はびたりの中いたしました。それを考えると、あんなに悪さばかりしなければよかったと悔やまれます、まあ、その分の罰はたっぷり受けたんでございますが。

これだけの目に遭つたうえ、こんな悪い冗談を言われ、こんなやつ捨ててやるときっぱり決めました。これは前からの考えで、腹の中に持つてはいたんですが、この最後の一件でいよいよ臍^{はら}を固めたんでございます。で、それがどんなしだいだつたかと申しますと——。こうした騒動があつた翌日、あたしどもは街へ稼ぎに出ました。前の晩はどしや降りで、明けてからもずっとやまなかつたんで、濡れずに済むようその町にあつた拱廊^{きようろう}を祈禱の客を探しながらまわりました。やがて日が暮れましたが、雨は相変わらず。そこでやつは申しました。

「ラサロ、この雨はなかなかやまん。夜になるにつれひどくなる一方だ。今日は早じまいして宿へ引きあげよう」宿へ帰るには雨水が川になって流れている場所を通らなければなりませんでしたが、なにせ大雨でかなり幅がございました。あたしはやつに申しました。

「おじさん、水の幅がだいぶあるよ。でも、もしよかつたら、足を濡らさないでさつと渡れる場所を教えてください」

やつはいいことを言うと言喜んで申しました。

「よし、よし、お利口さんだな。だからわたしはおまえが好きなんだ。その狭くなつてるところへ連れていってくれ。なにしろ今は冬だ。水はうれしくない。まして足を濡らすなんてぞつとする」

あたしは、うまくいった、しめしめと、やつを拱廊から連れ出して、広場の周りに立っている石の柱へ向かい
ました。家々の張り出し部分を支えている中の一本でございます。その前までくると言ってやりました。

「おじさん、ここが水が流れてる中で一番狭くなってるところだよ」

大雨の中、あわれやつは濡れ鼠。あたしもそうですが、雨に降られる場所から逃れたいと焦っております。
それになにより、神様があたしに仕返しさせようと思し召し、そのときに限ってやつの心の目を曇らせてくだ
さいました。そんなこんなでやつはあたしの言葉を信じ込み、こう申したんでございます。

「わしをちようどの場所に立たせて、まずおまえが跳んで渡れ」

そこでやつを石の柱の真正面に立たせたあと、ぴよんと跳んで、突きかかってくる猛牛を待ち受ける人間みた
いに柱の向こう側へまわり、こうけしかけてやりました。

「そら！ 思いつきり跳んで、こつち側へきて」

そう言いおわるかおわらないうち、じいさん、なんにも知らずに山羊並みの突進をいたしました。なるだけ大
きく跳ぼうと、踏み切る前に一歩下がりが、力いっぱい跳んだんでございます。そして案の定柱に頭をぶつけま
した。まるで大きな力ボチャをぶつけたようなすごい音がして、それからあおむけに倒れました。頭がざっくり割
れ、半死半生のざま。

「どうしたの？ ソーセージは嗅ぎつけられたのに、石の柱の臭いは駄目だったってわけ？ いけないよ、ちゃ
んと鼻を利かせてなきゃ！」あたしはそうからかってやりました。

やつを助けようと大勢集まってきておりまして、あとはその連中に任せ、急いで町の門を出ました。そし
てすっかり暗くなってしまう前にトリーホスに着きました。あのあとやつがどうなったかは知りませんでし
し、知ろうとも思いませんでした。

¹² トリーホスも安心できない気がしたあたしは、次の日、さらにマケータという町へまいりました。そこで、こ

れも身の因果、ある坊主と出会いました。寄っていつてなにか恵んでくださいと頼むと、ミサの手伝いはできるかと尋ねますんで、できると答えました。これは嘘ではないんですよ。と申しますのも、あの罰当たりじじいにはひどい目に遭わされましたが、役に立つこともいろいろ教わりました。ミサの手伝いもそのうちのひとつ。こうしてあたしはその坊主の下男になりました。ところがこれが一難去つてまた一難というやつで……。と申しますのも、お話ししたようにあの目の見えないじいさんは欲の塊ではあつたものの、そのやつさえこの生臭坊主と比べれば、アレクサンドロス大王並みに気前がいいと思えたからでございます。世の中のしみつた根性を残らず集めて練り固めたような人物、この男についてはこれ以外申す言葉がございません。それが生まれつきなのか、それとも坊主になつてから身についたのかは存じませんが。

こいつは古い櫃を持っていて、ふだんはこれに鍵を掛けていたんですが、その鍵はケーブに結わえた革紐に下げ、いつも身に着けておりました。教会からお布施のパンが届くと、すぐさま自分で櫃の中へ放り込んで鍵を掛け直します。家じゅう探そうが食べ物なんかひとつもございませんでした。ふつうどこの家でも、竈のフードに吊るした塩豚とか、板に置いたチーズとか、食事で余つたパンを籠に入れて棚に載せたのとかを目にいたしますが。こんなのがあれば、たとえありつけないとも見るだけで気が休まつたんじゃないかと。あつたもんといえは玉葱を房みたいに繋いだのがひとつだけで、おまけに屋根裏部屋に鍵を掛けてしまつてございました。この中から一個、四日分の食べ物として与えられておりました。玉葱をとりいきますから鍵を貸してくださいと言うと、もしその場に誰かいれば、別になんでもないような顔を作つて内ポケットに手を入れて鍵の紐をほどこき、こつちへ渡しながら申します。

「そら、あとで返すんだよ。好きなだけ食べてきなさい」

まるで鍵をあけた扉の向こうは、バレンシア名物の果物の砂糖漬けで溢れ返っているような口振りでございます。申したとおり、その部屋には釘に掛けた玉葱の房のほかにもなかつたのに。その玉葱も数をきつちり数えておりました。ですからもし罪深い身のあたしが誘惑に負け、許された以上に食べていたとしたら、さぞたいへ

んだつたでございましょう。というわけで、こっちは餓え死に寸前というありさまでございました。

ところが、あたしにはあんまりかけない慈悲を、自分に対してはたっぷりかける坊主で、いつも昼と夜、肉を五برانカ分食べておりました。それはまあ肉汁ぐらいは分けてくれました。でも肉なんてただのひと切れも！ あとはパンを少しだけ。せめて腹五分目ぐらい食べられたら御の字だったのに。

あの土地では土曜に羊の頭を食べる習慣がございます。あたしは言いつけられてそれを買いにまいっております。三マラベディー払って買ってくると、あるじはそれを煮て、目、舌、首筋、脳味噌、顎の肉と平らげたあと、齧り尽くした骨をまとめてよこしました。皿に載つたそいつを渡しながら申しております。

「さあ、食べなさい。味わいなさい。わが世の春、教皇様もおよばない贅沢三昧の暮らしだな」

「そう言うんなら、あんたがこんな暮らししてみりゃいい！」あたしは聞こえないように呟きました。

下男になって三週間経つところにはふらふらになり、腹が減って減ってろくに立つてさえいられなくなりました。神様のお助けと自分の才覚を頼みに切り抜けなければ、あの世行きは目に見えておりました。けれど知恵を働かせようにも、その折りがございません、なにしろくすねるもんが見あたりませんの。たとえなんかあつたとしても、前のあるじと違ってやつ目の目をくまますことはできなかつたでございましょう（あのとき柱に頭をぶつけて死んでしまったんなら、神様、どうかあの男の罪をお赦しください）。いくら抜け目なくても、なにしろ見える目というだいなもんがなかつたんで、やつぱりこっちの悪さに気づかないこともございました。ところがこの新しいあるじ、こいつぐらいなんでも見える男はおりません。ミサで貝殻をまわして献金を集めるときは、一文たりと見逃しませんでした、片っぱの目で参列者を見、もう片っぱであたしの手を見張っているという具合で。その目は顔の真ん中で、水銀の玉みたいにくるくる動いております。献金された小銭は一文残らず数えていて、貝の皿がひとまわりすると、すぐにあたしからとりあげて祭壇の上に置きました。

この生臭坊主に使われて生きているあいだ、というより死んでいるあいだじゅうずっと、一文もくすねられませんでした。酒なんて、一برانカ分すら酒屋へ買いに遣られた覚えはございません。信者が供物として持つて

きたのを例の櫃の中にしまい込み、そのちよつとの酒をちびりちびり、まる一週間かけて飲むでございます。そしてこのひどいしみつたれ取りを繕おうと、こう申します。

「いいかね、ラサロ、飲み食いはなるだけ控え目に、というのが司祭たる者のあるべき姿なんだよ。だからわたしは他人と違って度を過ごさないんだ」

だけどの我利我利坊主の言うことは大嘘。と申すのは、信心会の集まりや葬式なんかに祈禱のため呼ばれ、他人の金で飲み食いできるときは、餓鬼みたいににがつがつ食べ、うわばみかというぐらいがぶがぶ飲んだからでございます。葬式といえは——神様、お赦してください——このときに限ってあたしは人間らしさをすっかり捨てておりました。そうなったのは、そこで馳走を、しかもたらふく食べさせてもらつていたためでございます。神様が毎日わが子を殺してくださらないかと願つておりました。そう祈つてさえおりました。病人に秘跡を、とりわけ終油の秘跡を授けると、あるじの坊主がその場のみんなに祈るよう言つたらば、万が一にも他人に後れはとりません。そして心の底から、ほんとうに本気で神様にお願ひいたしました。いえ、本人の望むほうへお導きくださいと、そうあたりまえに願うんでなく、この世からお連れくださいと願うんでございます。もしも生き返る者があれば——神様、お赦してください——千回呪いました。ちゃんと死んでくれたなら、反対に千回冥福を祈つてやりました。どうしてこんなことを申すかといえは、この坊主とは半年近くいたでございましょうか、そのあいだに死んだのはたつた二十人ばかり。でも、あたしは信じて疑わないんでございます、これは全部自分が殺した、つまりあたしが神様にお願ひして死なせていただいたんだと。というのも、毎日毎日死ぬ苦しみに悶えているのを見かね、神様が「よし、それならば」と、あの人々を殺してあたしを救つてくださったのではないかと思うからでございます。でも、所詮、あのころのひもじさの苦しみはどうにもなりませんでした。葬式が出た日には生き返らせてもらえても、そのあとずと誰も死ななければ、またいつものひもじい毎日へ戻るはめになつて、なまじい思いをしただけつらさがいつそう身に染みたためでございます。というわけで、あたしがひと息つけるかどうかはひとえにお迎え頼み。お迎えと申せば、他人に對してもそうでございますが、自分にも願

うときがございました。けれど四六時中死ぬ思いはしていても、最後までそれはまいりませんでした。

こんな因業^{わけ}なあるじなんか捨ててやろうと、なんべん思ったか知れませんが。けれど思いとどまりました。それには二つ理由^{わけ}があつて、まず足が頼りになるかどうか知りませんでした、いつも死ぬほど腹を空かして、体力に自信がございませんでしたから。もうひとつには、こう考え、こう心の中で呟^{つぶ}いていたからでございます——これであるじは二人目だ。前のあるじには死ぬほどひどい思いさせられてた。ところがやつを捨ててこいつと出会い、今度は餓え死にしかかつて。で、このあるじを捨てるのはいいけれど、次にもっとひどいのにあたらうもんなら、そのときはほんとに殺されるだけだ。——こう考えると身動きがとれませんでした。なにせどう爪弾^{つまび}こうが音は低くなるばかり。そしてもう一音下げればラサロは音がしなくなる、この世でその音は聞かなくなると信じたんでございます。

こうしてあたしは苦しみ^{くるしみ}にのたうちまわりました。それが信心深いキリスト教徒であれば救つてやりたい、そう神様が思ひ召すほどのひどい苦しみでございました。かといつてこれといった知恵も浮かばず、わが身が追い詰められていくのをただ眺^{なが}めているだけ——。そんなある日、あたしのけちな、さもしい、欲張りのあるじが町の外へ出かけました。その留守のあいだに、たまたま家の戸を叩いた鑄掛け屋^{ちうかけや}がありました。思うにこの男、鑄掛け屋の姿で神様が遣^{つか}わしてくださつた天使でございました。なにか直すもんはないかと尋ねましたから、あたしは、「そりゃあおいらには直して欲しいところがあるよ。それをどうにかしてもらえたらうれしいんだけどねえ」と——。ただ、ぼそぼそ呟^{つぶ}いただけでしたんで、相手には聞こえませんでした。けれど冗談を言っている場合ではございませんので、あれは聖霊のお導き、こう申しました。

「おじさん、この櫃の鍵をなくしちゃつて、旦那様から鞭で打たれるんじゃないかってびくびくしてるんだよ。お願いだから、おじさんが持つてる鍵の中に合うのがあるかどうか試してみてくれないかなあ、お代は払うから」鑄掛け屋天使は、持っていた大きな鍵束の中から一本ずつ試していきました。あたしも弱々しい声で祈りを唱えて手助けいたしました。と、突然、櫃が開き、その中に、よく言う「パンの姿をとつた神の顔」が見えました。

あたしは蓋のあいた櫃を前に、鑄掛け屋にこう申しました。

「鍵代にあげられるお金はないんだけど、この中からとつてそのかわりにして」

鑄掛け屋は、そこにあつたパンのうちから一番よさそうなのを一個選んでとると、鍵を渡し、大満足で去っていききました。こっちは大満足どころではございません。

でも、さしあたりパンには手をつけませんでした。おかしいと感づかれたら元も子もないと思つたんでございます。それに、これだけの宝の山の主^{ぬし}になつた自分には、ひもじさのやつもおいそれとは近寄れないような気さえしておりました。やがて、なんにも知らないあるじが戻つてまいりました。幸い、天使が供物のパンを持つていったのには氣づかれませんでした。翌日あるじが出かけると、すぐさまパン天国の扉を開いて一個頂戴し、むしろむしゃむしゃ食べました。それは一瞬とは申しませんが、二瞬ぐらいでこの世から消えてなくなりました。もちろん、うっかり櫃の鍵を掛け忘れるようなへまはいたしません。それから、とても明るい気分であの掃除をはじめました。こんなふうによれば、この先つらい毎日が楽になると思つたんでございます。

こうして、おかげでその日一日心うきうき過ぎ、翌日も同様でございました。けれど、つきもこれまで。こつちほつとしたのも束の間。というのも次の日、三日目には、文字通り三日天下に終わつたからでございます。どういふ事情かと申せば、あたしを餓え死にさせかかつていた因業坊主が櫃に取り憑いてるのを、思いがけず目にしたというわけで。中を何度も引つかきまわし、繰り返しパンの数を数えておりました。あたしは知らん顔しながら心の中で祈りました、願いました、念じました、聖ヨハネ様、こいつの目を潰してくださいと。

それからやつはずいぶん長いあいだ計算しておりました。指を使って日にちを数えておりましたが、あげくこんなうきまわし。

「しつかり鍵を掛けといたからよかつたようなものの、でなけりやパンを盗られたと青くなるところだ。だがちよつとでも変な疑いを持つのは嫌だから、とにかくこれからはきちんと数を勘定しておくでしょう。九個と、ちぎつたのがひとつだな」

「九は九でもきゅうきゅう言つてろ！」あたしは心の中で罵りました。

でも、やつと言葉を聞いて、心臓を毒矢で射抜かれた心地がしておりました。食べるもんも食べないものも活へ逆戻りするかと思うと、ひもじさが胃袋を搔きむしりだしました。このあとあるじが外出してから、気休めに櫃をあけて中のパンを見て拝みました。けれど、さすがに拝領まではしかねました。あの我利我利坊主のやつ、ひよつとして数をまちがえてやしないかと数えてみましたが、期待に反して正確でございました。だから、やらパンにキスするぐらいが関の山。そこでせめてもと、パンを切り口に沿ってなるだけ慎重に薄く切りとり、それでその日一日を過ごしました。もちろん前ほど楽しい気分ではございません。

それどころか、ひもじさはいっそう切実になっておりました、なんといつてもあの極楽気分の二日というか三日というか、あのあいだに胃袋がもつとたくさんパンを食べるのに慣れてしまっておりましたんで。ですから苦しみにのたうちまわりました。それはもう並大抵の苦しさでなく、あたしはひとりになるとなにも手につかず、ただ櫃をあけたり閉めたりして、子供たちの言う例の「神様の顔」を拝むばかり。けれど苦しむ者に手を差し伸べてくださるあの神様が、こんな命の瀬戸際にいるのを見かねてちよつとした知恵を授けてくださいました。あたしは腹の中でこう考えを巡らしました——このでっかい櫃は古くて傷んで、小さいけどところどころ穴もあいてる。鼠がはいり込んで中のパンを囓ったって不思議じゃない。そりゃあまるまる一個つてのはまずい、あの人殺しめ、なくなつたと大騒ぎするだろうから。でも、鼠が囓るぐらいの分ならしかたないと諦めるだろう。

そこで、近くにあつたあんまり上等とは言えないテーブル掛けの上で、パンをちぎりにかかりました。とつては置き、とつては置きして三、四個から少しずつちぎり、それからそのちぎったやつを砂糖菓子でも摘まむみたいにして口に入れ、いくらかひもじさをごまかしました。やがてやつが食事しようとやってまいりました。そして櫃をあけたとたん、胸の張り裂けるような光景が目飛び込み、てっきり鼠が悪さしたんだと思い込みました。それぐらいまく鼠のしわざに見せかけてあつたんでございます。やつは櫃を隅から隅まで調べ、ところどころ穴があいているのをみつけて、さてはここからかと合点するとあたしを呼んで申しました。

「ラサロ！ ほら、見なさい、ゆうべわたしらのパンがどんな仕打ちを受けたか！」
あたしは「えーっ！」と目をまるくしてみせ、いったいどうしたのかと尋ねました。

「どうしたものにも！」と、やつは申しました。「鼠だ。あいつらときたら、なんでもかんでも食い尽くしてしまう」

それから二人で食事をはじめました。相変わらずついていて、ここでもタナポタがございました。日ごろもらつていたパンは雀の涙ほど。でも、それよりましな量のパンにありつけたんでございます。つまり、鼠に囓られたと思うところを残らず小刀でこそぎとり、こう言つたというわけで――

「これを食べなさい。鼠はきれいな生き物だからね」

こうしてその日あたしは手の、いえ、正しくは指先の働きの成果を足した食事を終えました。もっともほんとうは終えるものにも、そもそもその前に食事をはじめた覚えなんか、一度もなかったんでございますが。

そのあと、あたしはまた頭を抱えるはめになりました。見てると、やつめ、躍起になつて壁の釘を抜いてまわつたり、板切れを探してまわつたりしました。そしてそんなのを使つて、あの古い櫃の穴を残らず塞いだんでございます。

「ああ、神様！」と、そのときあたしは呟きました。「人はこの世に生まれ、どれだけの災い、不幸、不運に見舞われるんでしょう！ このつらい浮き世、喜びはなんて儂いはかないんでしょう！ その証拠がおいらです。あんなみみづちい情けないやり方で、ひもじさをなんとかしよう、凌しのごうと思ひ、うまくいったとちよつぱり喜んでました。けれどこれも身の因果、かえつてあのあるじの欲張り根性を掻き立ててしまいました。強突く張りつていうのはたいていまめで、あいつだつてもとそうだったんですが、それに拍車がかかりました。そのせいでいまや櫃の穴が塞がれて慰めが閉め出され、苦しみに扉が開かれました」

こんなふうにはやいておりました、うちの働き者の大工さんが板をあちこちあてがい、これでもかとはかり釘を打っているあいだ。やつは仕事をしあげると申しました。

「さあ、こそ泥鼠のお歴々、考えを変えたほうが利口だよ。このうちじや、いい目は見られないんだからね」

このあとあるじが外出するとすぐ、仕事のしあがり具合を見にいきました。そしてあの古いぼろ櫃には、穴どころか蚊のはいる隙間さえ残っていないとわかりました。あたしは持っていてもしかたなくなつた鍵を取り出して、なんにありつけるというあてもないまま櫃をあけました。食べかけのパンが二、三個、あるじが鼠に齧られたと思ひ込んだやつが目にはいりました。あたしは剣の達人みたいに服は切れども体は切らずといった感じで、それからなおほんのちよつぱり摘まみました。人間追ひ詰められたら必死になります。だから、いつもぎりぎりまで追ひ詰められていたあたしは、どうやって命を繋ごうかと昼も夜も考えておりました。で、こんな惨めつたらしい小細工があればこれ浮かんだについては、ひもじさという光に導かれたおかげかと。というの、ひもじさは知恵のもとで、満腹はその反対なんだとか。あたしの場合にはこれがよくあてはまりました。

というわけで、ある晩、今申したようなことを考え、まんじりともせずにおりました。どうやって櫃を自分のもんにして中味をくすねようかと、知恵を絞っておりました。ふと気づくと、あるじは寝入っている様子、鼾と寝てるときの荒い息が聞こえましたんで。あたしはそうつと、音を立てないようにして起きあがりました。昼間のうちにひとつ作戦を考え、そのへんにあつた古い小刀をすぐわかるところに置いておりましたから、それを手にぼろ櫃の置いてある場所へいって、どのあたりが一番狙いやすいか目星をつけておいたあたりを、ぐりぐりやって攻めたてました。櫃のやつは相当な歳で、ずいぶん老いぼれていて、もう力もなければ気力もございません。それどころかとももろいぼろぼろの代物。だから呆気なく降参し、作戦用の適当な穴を脇腹にあげさせました。こうしておいて手負いの櫃の蓋をそろそろとあげ、手探りしてちぎつたパンが触れると、今申したように盗み食ひいたしました。おかげでひと息つけましたんで、もとどおり蓋を閉めて藁の寝床へ戻り、横になつて少し眠りました。でも、ぐつすりというわけにはいかず、あたしはそれをろくに食べていないせいだと思ひました。実際そうだったでございましょう、たとえフランス王並みに思ひ悩んでいたとしても、あんな時間にぐつすり眠れないなんて、それはもうあるはずがございせんから。

翌日ご主人様はやられたとお気づきあそばしました、穴をあけられてパンを食べられたと。そしてあたしのしわざとも知らず、鼠どもを罵り倒してこうおおせになりました。

「いったいどうしたって言うんだ。うちは今まで鼠の気配なんて全然なかったじゃないか！」

事実、そのとおりだったにちがいありません。この国に鼠から免税特権を与えられてしかるべき家があったとすれば、それは当然あそこだったでございましょうから。なにしろ、ふつう鼠は食べ物のないところには住みませんので。

あるじは、もう一度家の中や外の壁を見てまわって釘と板きれを探してきて、櫃の穴を塞ぎました。夜になってあるじが寝てしまうと、さっそくあたしは起き出して例の小刀を手にいたしました。こうして、昼間あるじが穴を塞ぎ、夜あたしがあけ直す、これの繰り返しになりました。

こんな調子でございました。お互い大忙しでございました。こういうことがあればこそ、きつと「閉まる扉あれば開く扉あり」なんて申すんでございましょう。結局二人してせつせとベネロペの機織りをやっているようなもんでございます、なにしろあるじが昼間織った布を、夜になるとあたしがほどこしていたんでございしますから。だからその「食料庫」にしてみれば災難、何日も経たないうち見るも無惨な姿になってしまいました。それにびつたりの言葉で言い表わそうとするなら、外側が釘と鉋だらけなところからして、「櫃」ではなく、ひと時代前の古めかしい「鎧」と申すべきだったでございましょう。

やがて坊主のやつ、こんなやり方では駄目だと悟って申しました。

「この櫃はぼろぼろだ。だいたい木が古くてもろくなってるんで、鼠に簡単にやられてしまうんだ。すでにこういう状態なんだから、この先まだ使っていくとなると、中にしまってもしまわなくても同じになってしまう。だがとにかく困るのは、役立たず同然にしろ、それでもやつぱりなければ別のが要するということだ。そうなら三、四レアルの出費は覚悟しなければならん。これまでのやり方じゃ駄目となると……今度は中に鼠捕りを仕掛けてこの腹の立つ鼠どもをとっ捕まえてやろう。これが今の時点で最善の策だ」

それからあるじは鼠捕りを貸してくれるところを探し、近所でもらってきたチーズの皮を餌にして、四六時中櫃の中に置いておくことにいたしました。あたしにとつてはもつきの幸い。と申しますのも、「空き腹にまづいものなし」とはいえ、それでもやつぱり鼠捕りから失敬するチーズの皮はいいおかずになりましたんで。もちろんそういうもんがなくなつたつて、パンを鼠のせいにして食べるのをやめはいたしませんでしたけれども。

蓋をあけてみればパンは齧られてるわ、チーズは食われてるわ、そのくせ犯人の鼠は捕れてないわというありさま。あるじは怒り狂いました。隣近所の人々を捕まえ、チーズはやられていて鼠捕りから消えてなくなつてのに、肝心の鼠はかかつておらず中にいない、ところが戸はちゃんと落ちてる、これはいったいどうしたわけだと尋ねると、みんな口を揃えて、そりゃ悪さしたのは鼠じゃない、だって鼠なら一度もかからないのはおかしいと申しました。ある男がこう謎解きいたしました。

「そういえばお宅じゃよく蛇が出てましたなあ。こりゃ絶対そいつのしわざでございますよ。蛇だつたら納得いきます。なにしろ体が長いから、隙を見て餌をとつたとき戸が落ちてきても、体は半分外なんでまた出られます」聞いてみんななるほど頷きました。あるじはそれはたいへんと血相を変え、その日からおちおち眠らなくなりました。夜中に木食い虫が音を立てるたび、蛇が櫃を齧つてゐるんだとはっとして飛び起きます。そしてあの謎解きを聞いて以来、いつも枕許に置いていた棒をひつ掴み、蛇を脅そうと櫃をがらがん叩きました。櫃こそいい迷惑。このうるささに近所じゅうが起こされましたし、あたしも眠れませんでした。また、あるじはあたしのところへきて、寝床の藁を引つ掻きまわしたり体を探つたりいたしました。蛇がこつちへきて、藁かシャツの中に潜り込んでないかと疑つたんでございます。と申しますのも、蛇は夜になると暖かい場所を求めて赤ん坊の寝ている揺り籠に潜り込むし、そのとき赤ん坊が囁まれて危ない目に遭うことだってあると聞かされておりましたんで。

そんなときあたしはたいてい寝たふりをしていたんですが、朝になるとこう言われておりました。

「なあ、ゆうべはなんともなかったかね？ 蛇を追いかけたんだが、ふつうだつたらおまえの寝床へいくと思うんだよ。あれは体温の低い生き物で、暖かい場所が好きだからね」

「噛まれなきやいいけど。怖いなあ、怖いなあ」あたしはそうしらばくれておりました。

こんな調子であるじが夜まんじりともせず目を爛々と光らせておりましたんで、いやもうほんと、蛇は、正確に言えば蛇人間は、夜中に櫃を齧るところか起きてそっちへいくことさえできませんでした。そのかわり昼間、やつが教会や町のどこかへいつている隙を狙って「襲撃」いたしました。あるじは食い荒らされた跡を見て、これだけやつても駄目かと気落ちし、申したように幽霊みたいに夜中じゅうろうろうしておりました。

こんなに血眼になつて蛇を探されたら、そのうち寝藁の下に隠してある鍵をみつけれらんじやないかとひやひやいたしました。で、口の中に入れて寝るのがなにより安心と思いつきました。と申しますのも、あの目の見えないじいさんと四六時中いるようになって以来、口を巾着がわりにするのはお手のものになっていて、半ブランカ玉ばかりで十二、三マラベデーも口に入れたまま、平気でものを食べることだつてできたからでございます。そうでもしなければみんなあの因業じじいにみつかつて、一ブランカも自分のもんにはなりませんでした。とにかくしょっちゅう調べるんでございますから、それこそ服の縫い目やあて布までも。

こんなわけで、申したように夜になると鍵を口の中に入れ、あるじの千里眼もこまでは届かないと安心して眠っております。けれど「どうあがこうが運命さだめには勝てぬ」とやら。あれは運命、いえ、正しくは自分の罪深さのせい。ある晩、眠っているとき鍵が、おそらくあいたままになっていた口の中で、こう、ぴったりの場所に動き、中空になつていたそいつの中を空気が——寝息が通つて、音がひゅうひゅう鳴ったんでございます。そしてこれまた持つて生まれた運の悪さ、それがとても大きな音だったもんだから、びくびくしていたあるじの耳にはいりました。やつはてつきり蛇の出す音だと思ひ込みました。なるほど似ていたでございましょう。

で、そうつと起きあがると、例の棒を握り締め、音を頼りに手探りで、蛇に感づかれないようそろりそろりとあたしのほうへやつてまいりました。そして間近までくると、蛇が人間の体の温かさに引かれ、あの、あたしが寝ている藁の中へ潜り込んだと睨みました。そこで、この下だ、ぶっ叩いて殺してやると、棒をうんと振りかぶつて力いっぱい振りおろしました。ところがそれがあたつたのはこっちの頭。あたしはその猛烈な一撃で気を失い、

頭には大怪我を負ってしまいました。

手加減なしにやられて、きつとものすごい悲鳴をあげたんでございましょう、やつはあたしを殴ったんだと気づきました。あとで本人が申しておりますが、あたしの傍へきて大声で名前を呼んで正気に返そうとしたんだとか。でも手で触ったとき、血がだらだら流れているのを感じ、大怪我させてしまったとどきりとしたんでございます。そこでおおあわてで明かりをとりにいき、それを手に戻してみると、目にしたのはうんうん唸っているあたしの姿。鍵は相変わらず口の中で、こればかりはけつして吐き出しませんでした、ただ半分外へ出てしまっておりまして。ひゅうひゅう鳴っていたときもちょうどこんな具合だったのかと。蛇殺し坊主はこれはなんの鍵かと驚き、口から取り出してしげしげ眺めておりましたが、そのうちはたと思いあたりまして、先のでこぼこが自分の持っているやつとまったく同じだったんで。すぐさまそれを試しにいつて、それが謎解きの鍵と知りました。この因業な鼠捕り兼蛇捕り坊主め、おそらくそのときこんなふうに呟いたんではないかと、「財産をむさぼり食うやつかいな鼠と蛇をみつけたぞ」。

このあとの三日間の様子となると、まるで鯨の腹の中にいたヨナ同然で、なにも申せません。けれど気がついたあと、今お話ししたことに加え、あるじの口からいろいろ聞きました、なにせあの家へ誰かやってくるたび詳しく喋っておりますんで。

まる三日経って正気づきましたが、見れば自分の寝藁の上に横になっております。そして頭にはべたべたと膏薬が……油や塗り薬をうんとつけられて。あたしはもうびっくりして、「なに、これ？」と言うと因業坊主のやつ、「そりゃあ、おまえ、わたしを破産させかかっていた鼠やら蛇やらを、すっかり退治したということだよ」と。

自分がどうなっているかあらためて調べました。そしてひどいざまのを知り、すぐに、これはなにかまずいことになったなと思いました。

このとき祈禱師の婆さんと近所の人たちがはいってきて、頭の檻^{ほろ}をほどいて傷の手当てにかかりました。みんなあたしがわれに返ったのを見てとても喜んで、「気がついたんだからもう大丈夫だろう」と申しました。そ

してまたあたしのしくじりの話をして、げらげら笑いました。その横で、愚かな人間であるあたしは泣きました。でも、とにかく、この人たちはひもじさに苦しんでいたあたしに食べ物をくれました。もつとも、それも所詮焼け石に水でございました。

で、こう、ちよつとずつ回復していき、二週間目には床を離れました。こうして命拾ひしたものの、ひもじさは相変わらずで、半病人といった体ていでございました。

それから、床離れた翌日でございましたが、ご主人様はあたしの手をとって玄関から外へ出し、往来に立たせておおせになりました。

「ラサロよ、今日からおまえは自由だ。もうわたしには縛られない。別の主人を探しなさい。達者でな。こんなまめな下男を傍に置いておくのはかなわん。以前は盲人に雇われていたそうだが、なるほどさもありなんだ」それから、まるであたしに悪魔でも憑よいているみたいにこつちへ向かつて十字を切ると、また家にはいつてぴしやりと戸を閉めたんでございます。

註

1 四種類残っているもつとも古い刊本（以下「古刊本」。いずれも一五五四年発行）では、この前に「前書き」とある。こうした章題については「解説」（次々号に掲載予定）参照。

2 『書簡集』（Ⅲ—Ⅴ—10）で、小ブリニウス（六—ごろ—一三ごろ）が叔父の大ブリニウス（二三ごろ—七九）の言葉としている格言。

3 『トウスクルム莊対談集』（Ⅰ—Ⅱ—4）にある言葉。

4 自分たち夫婦にかんし、世間でよからぬ噂が囁かれていること。それがなにかは物語の最後の部分で述べられる。「解説」参照。

5 古刊本ではこの前に、「第一章 ラサロが生い立ちと両親について語る」とある。

6 「デ」は英語のDにあたる。題にある「ラサリーリョ」は「ラサロ」の別称で、「トーマス」に対する「トム」のようなもの。

7 福音書マテオ第五章一〇。

8 チュニジアの島。一五世紀の終わりから一六世紀初めにかけて、スペインはオスマン・トルコの西進を阻止するため北アフリカ沿

- 9 岸部へ進出したが、一五一〇年、この島で大敗を喫した。
 一八九〇〜一九九〇／二一六？。ギリシャの医学者。多くの医学書を書き、一七世紀に至るまで医学の権威と崇められた。
 約七・五センチ。
- 10 物語の最後、サン・サルバドール教会の主席司祭の葡萄酒を呼び売りしたことをきっかけに、「文句なしの幸せの絶頂に達し、
 わが世の春を迎えた」ことを指す。
- 11 古刊本にはこの前に「第二章 ラサロがある司祭に奉公したこと、およびその奉公の間のこと」という章題がある。
- 12 聖ヨハネは下僕の守護聖人。
- 13 「フランス王」とは具体的に、神聖ローマ帝国皇帝カール五世（スペイン王カルロス一世）に敵対していたフランス王一世、ま
 たはその子のアンリ二世を指すのか。あるいは権力者一般を象徴する言葉か。さらには全体が慣用語である可能性も考えられる。
- 14 ギリシャ神話の人物。トロイア遠征に赴いた夫のオデュッセウスが不在のあいだ、数多くの者に求婚されたが、織物がしあがっ
 たあと返事をすると言っておいて、昼間織った分を夜になつたらほどこいていた。
- 15 旧約聖書のヨナ書の主人公。海に投げ込まれて大魚に呑み込まれ、その腹の中に三日三晩とどまった（第二章）。
- 16 祈禱により治療を行なう者。祈禱とともに薬を用いる場合もあった。
- 17